

持続可能な社会のための情報誌



水と緑の
地球環境本部

マイECCO

Vol.
33

2013
JUNE
JULY

take free

INTERVIEW

富士山は「神さまの山」

女優、脚本家

近衛 はなさん

REPORT

有機綿の栽培で
被災地の復興を

フクシマ・オーガニックコットン
プロジェクトが展開中

FOOD

富士山のふもとで
無農薬の野菜づくり

静岡県富士市の^{テラスド}照土富士

CONSUMER

エコでエシカルな
ライフスタイルを
チーム・グリーンズほか

MOTTAINAI

節約＋エコの洗濯を
ライオンとの共同企画

CSR

包装に残布をリユース
自然派化粧品「スタイラ」

近衛 はなさん

富士山の風景に魅了され

女優、脚本家



富士山が世界遺産に——。国際記念物遺跡会議(イコモス)が4月末、富士山を三保の松原を除いて世界文化遺産に登録するよう国連教育科学文化機関(ユネスコ)に勧告し、各地で喜びの声が上がりました。「学生時代から富士登山を楽しんでいる」という女優、脚本家の近衛はなさんに、富士山の魅力や自然への思いについて聞きました。

【聞き手・明珍美紀、撮影・山田茂雄】

「富士山が大好きだそうですね。私、登るんです。昨年も登りました。富士山の風景は特別です。ある高度を超えると植物はぐっと少なくなり、ひたすら火山質の岩と石の山肌を登っていきま。はるか遠くに街灯りが見えて頭上には満天の星。なんだか違う星にやってくるような不思議な気持ちになります。」

—いつから富士登山を。

初めて登ったのは、大学生のとき。友だちを誘って。夜更けから登り始めて翌朝の5時くらいに頂上に着き、ご来光を拝みました。雲が朱に染まり、雲の下からぼんやりとお日さまが昇るのを見たときは、心が震えました。日本人が古来より富士山を「神さまの山」としてあがめ手を合わせてきた、その気持ちがわかるような気がしたのです。

富士のすそ野で野菜づくり

—その富士山が、いよいよ世界遺産の仲間に加わります。イコモスの勧告を受け、6月半ばからカンボジアで開かれるユネスコ世界遺産委員会でも正式決定される見通しです。

私は富士山の東南にある静岡県裾野市で畑を借りて、休みの日には野菜づくりをしているのですが、ちょうどそのニュースを聞いたとき、裾野にいました。雲間から顔を出した富士山に、思わず「おめでとう！」って言っちゃいました。日本人の遺産が世界の遺産になる。なんだか誇らしい気持ちです。一方で、たくさんの人が押し寄せるとどうなるのか、心配



「旬の野菜が大好き」という近衛さん。東京都目黒区F&F自由が丘店で。

配もあります。私たちも、より一層環境保全に気を付けなければ。神さまの山なので、汚すわけにはいきません。

「先ほど話に出た畑での野菜づくりはいつから。」

3年前からです。最初に植えたのはジャガイモ。それからカボチャ、空芯菜(クウシンサイ)、シソ、サトイモ、シヨウガ、オクラ、ニンジン、ダイコン……などなど。土を耕し、草むしりをしていくと無心になりますよ。畑で、虫やカエルを追いかけ回して遊ぶのも楽しいです。汗をふきふき、ふと顔を上げると、富士山がある。いつ見ても、その美しさに胸

アやフランスなど海外で暮らした経験もあるのですが、日本は過剰包装の国だと感じています。包装をしないで人に物を差し上げることに抵抗があるかもしれないけれど「そのままが素敵だ」という価値観があったといい。

—さて、仕事の面では脚本家としてもデビューしました。

初めての脚本は、NHKドラマスペシャル「白洲次郎」(09年)です。もともと、妻の白洲正子さんに興味があり、そこから次郎さんのことを知るようになりました。敗戦後のGHQの占領下、吉田茂の側近として活躍し、その後、実業家になった人です。次郎さんのカッコイイさは、いつどんなときでも自分らしく生きたことではないかしら。ご自身でも畑もやっていらしたんですよ。

私にとっては一番身近な職業でした。俳優はフィクションのなかで生きる。魅力的な仕事だと思っていました。

—「近衛はな」という芸名は、お祖父さま(時代劇俳優の故近衛十四郎さん)と、野に咲く花が由来だと聞きました。

子どものころから自然のなかにいるのが好きで、中学生のときの作文に「大人になったら農業をやりたい」と書いたぐらい。父の知り合いで家庭菜園をしていた人からトマトの鉢植えをいただき、ベランダで大事に育てながら観察していると、固くて青い実がやがて赤くなって熟れてくる。「こんな風にしてトマトは育

つんだ」という驚きがありました。

「畑にいて見えてきたことは。」

野菜は人が育てるのではなく、土と太陽と水が育ててくれる、ということかな。

自然から学び、寄り添っていくことが必要

を打たれるんです。

私は種をまき、ときどきお話をするとに自然の恵みを受けて、生きていくということを実感します。私たちの排泄物も畑に還せば栄養になるといっては、人も自然の循環のなかにちゃんと居場所があるという意味で、ちょっとした希望だと思えます。でも現代の文明社会は、そういうシンプルで大切なことから遠ざかってしまっている。自然の回復力を上回る速度で、人は環境を壊してしまっています。これからは、人間が自然から学び、自然に寄り添っていくかなと思います。

—日常では。

電気の無駄遣いには気を付けています。使わないときはコンセントのプラグを抜く。東日本大震災後、いつとき、みんなが省エネに励み、街のネオンサインが消え、駅の構内やビルの廊下が暗くなりましたよね。あれぐらいでちょうどいい。都市を明るくする必要はありません。それと、私はロシ

初めて脚本は、NHKドラマスペシャル「白洲次郎」(09年)です。もともと、妻の白洲正子さんに興味があり、そこから次郎さんのことを知るようになりました。敗戦後のGHQの占領下、吉田茂の側近として活躍し、その後、実業家になった人です。次郎さんのカッコイイさは、いつどんなときでも自分らしく生きたことではないかしら。ご自身でも畑もやっていらしたんですよ。

書くことも演じることも、普段の自分が何を考え、どのように生きているか、その姿勢が問われている仕事なのだ、ようやくこの頃になってわかるようになりました。これからは富士山に登ったり畑を耕したり、自然のなかで過ごす時間を大切にしていきたいと思っています。

世界遺産登録に期待

「私たちも

より一層の環境保全を」



「富士山は神さまの山」と語る近衛はなさん。東京都世田谷区奥沢の「珈琲 茶乃子」で。

近衛はなさん 1980年、東京生まれ。青山学院大学国際政治経済学部卒。在学中、フランス、ロシアに留学。脚本作品にNHKドラマスペシャル「白洲次郎」「続・遠野物語」など。出演映画に「獄に咲く花」「明日への遺言」「弥勒」などがある。この夏、インド旅行記を出版予定。

フクシマ・オーガニックコットンプロジェクト

耕作放棄地を活用し被災者の仕事に「天ぷらバス」に乗ってボランティア

みんな希望の種をまこう。福島県いわき市を中心に、「フクシマ・オーガニックコットンプロジェクト」が進行中です。無農薬で和綿を育て、収穫したコットンを素材にTシャツなどの衣類を製造。東日本大震災や原発事故で被災した人々の新たな仕事につなげようという計画です。4月下旬には、バイオディーゼルの燃料で走る「天ぷらバス」に乗ったボランティアチームが東京からいわき市へと向かい、種まきの準備作業に汗を流しました。

【明珍美紀 写真も】

ポット苗づくりに精を出す女性たち

「このバスの燃料は廃食油をリサイクルしたBDF。だから我々は天ぷらバスと呼んでいます」
大型連休前半の4月29日早朝、ボラン

ティア25人乗せた「天ぷらバス」が東京の新宿駅西口をスタート。ツアーを主催した「リボン」へエコツアーリズム・ネットワーク代表の志岐健一郎さん(58)が早速、名前の由来を解説しました。これから目指す地は、いわき市遠野町にある「遠野為朝集落」です。
連休中にもかかわらず、バスは常磐自動車道を比較的スムーズに走行し、出発から約3時間半後の午前11時ごろ、為朝集落に到着しました。
「ようこそ」。元氣よく出迎えてくれた

のは、地元で地域おこしの世話人を務める折笠茂子さん(57)と、プロジェクトを推進する、いわき市のNPO法人「ザ・ピープル」理事長の吉田恵美子さん(56)です。
折笠さんは一家で農業を営み、次男や長女夫婦もプロジェクトに積極的に協力。和綿は折笠さんの畑の一角でも栽培します。

この日の作業は、ポット苗づくり。ポットに土を入れて、種を埋め、じょうろで水をかけます。「植物の口は根にあります。コットンの場合水がたつぷりあった方がいいので、土はたくさん入れすぎないように」と折笠さんがアドバイス。みんな取りかかると早いもので、昼過ぎまでに約1200個のポット苗が出来上がり。ハウスで育ててから5月末に畑に定植します。

作業後は地区の施設で、昼食を兼ねた交流会。「3・11の震災のときは、この辺はそれほど被害がなかったもので、私たちがもハウスにある野菜をいわき市内の高齢者施設などに届け、農機具用の予備の灯油を提供してお風呂をわかすボランティアをしました」。折笠さんが当時の状



じょうろで水をかける西川さん親子

report

オーガニックコットン、復興スタディーツアー コミュニティ電力事業の3事業を柱に 「おてんとSUNプロジェクト」が始動

況を語ります。そして震災から1カ月後、予想もしない大きな余震が発生し「今度私は私たちが被害をこうむりました」。
折笠さんの自宅は大規模半壊。さらに水源地とのパイプが寸断され、水の供給がストップするという事態に陥りました。
「このままでは農業の再開はおろか生活もままならない。この状況をみんなに

訴えたい」と一昨春秋、被災地の女性リーダーと首都圏の女性たちによる車座交流会(NPO法人「JKSK」主催)に折笠さんが出席。そこで吉田さんたちと出会ったことがオーガニックコットンプロジェクトに参加するきっかけになったといいます。
続いて吉田さんが、昨秋から始動した「いわきおてんとSUNプロジェクト」

これまで日本の社会は効率優先で進んできました。「この震災を機に生活を見直し、持続可能なライフスタイルに転換したい。おてんとSUNプロジェクトをそのモデル事業にしていきたい」と強調します。
同じく主要メンバーの一人、復興スタ

ディーツアーを担当するNPO法人「ふよう土2100」理事長の里見喜生さん(44)は、地元の老舗旅館「古滝屋」の16代目。「畑で収穫できるものは食べ物だけではない。綿を育てれば服に、ナタネを栽培すればその油がエネルギーになる。子どもたちが未来に希望を持てるよう、お互いに支えあえる地域にしていきたい」と言葉に力を込めます。

フクシマ・オーガニックコットンプロジェクト オリジナルTシャツ6月から発売

いわき市のNPO法人「ザ・ピープル」が主催し、オーガニックコットン商品の製造、販売を手がける「アバンティ」(東京)などが協力。目的は、風評被害で野菜や米づくりが困難となった土地や耕作放棄地を活用して綿花栽培によって再生を図る▽福島で綿花の自給自足を目指し、自給率をゼロからプラスにする——などで、昨春からいわき市内の15カ所の農地で和綿の有機栽培をスタートしました。いわき市に避難してきた原発事故の被災者らも農作業に関わり、秋には約300*の綿を収穫。6月には「福島生まれのオーガニックコットン」の一部、取り入れたTシャツが発売されます。

今年には隣接する広野町でオーガニックコットンの栽培が始まり、千葉県などでも市民有志が取り組む予定です。

なお、Tシャツに先駆けて、綿と木でつくった「オーガニックコットンパイプ」(1個840円)＝写真＝を発売。仮設住宅に住む女性や福祉施設のメンバーらが仕上げました。「綿の中に入っている種を日本中のみなさんにまいてもらいたい。収穫した綿を私たちが育てた綿と合わせることで共にものづくりの輪を広げたい」とザ・ピープル理事長の吉田恵美子さん。



交流会で被災体験を話す折笠さん(奥)



苗を植える畑でプロジェクトの説明をする吉田さん(左)と里見さん

の内容を説明しました。ザ・ピープルはもともと衣類のリサイクルなどを手がけてきましたが、震災をきっかけに、地元でそれぞれ地域づくりの活動をしてきたNPOが連携。今年2月には企業組合が設立され、オーガニ



食には地域の女性たちが揚げた山菜の天ぷらも



アバンティ社長の渡邊さんも作業に汗を流す

フクシマ・オーガニックコットンプロジェクトを支える一人、「アバンティ」社長の渡邊智恵子さんが、被災地の復興支援と連動して力を入れているのが、「子どもたちの未来づくり」です。長野県小諸市にある「小諸エコビレッジ」で「わくわく・のびのび・えこども塾」を開いており、5月には福島県の児童養護施設などの子どもたちが、^{わら}藁の家づくりや畑の種まきなどを体験し、高原のすがすがしい空気を胸いっぱい吸い込みました。

小諸エコビレッジは、東京都港区が使っていた教育施設(旧小諸高原学園)を借り受け、同社のソーシャル事業部が運営。週末などに地元の有機野菜などを販売する「BIOマルシェ」を開催しています。同塾は「子どもと大人、都会と被災地など世代や地域を超えて生きていくための原点である衣・食・住の手法を学ぼう」と渡邊さんが発案。第一弾として昨夏、「ブーフー村プロジェクト」が始動し、敷地内の間伐材や周辺の農家から提供された藁を用いて、家づくりのワークショップがスタートしました。

今年からは、福島県の子どもたちを保養に招くことにし、「いわき育英舎」(いわき市)の子どもたち17人が5月3日から2泊3日の日程で小諸エコビレッジを訪問。さいたま市のボランティア団体「絆ジャパン」などが協力し、同市や群馬県富岡市の児童養護施設の子もたちも加わりました。同育英舎の9歳の女兒は「藁を束ねて家ができるとは思わなかった。外で思いっきり遊ぶことができてうれしい」と他の子どもたちと走り回っていました。

「震災だけでなく何らかの事情で家を失った子どもたちがいる。藁の家づくりを通して、心の拠り所をつくるサポートができれば」と渡邊さんは語ります。



子どもと大人が一緒になってつくった「藁の家」

畑で見つけたミミズ



藁の家に飾った子どもたちのメッセージ



小諸エコビレッジ内の畑で種まきの体験をする子どもたち。畑ではこれからオーガニックコットンも栽培

「わくわく・のびのび・えこども塾」では、活動のための寄付を募っています。連絡先はアバンティ (☎03・3226・7789) へ。また「絆・ジャパン」(<http://profile.ameblo.jp/hakuyukai/>) はボランティアを募集中。



廃食油をリサイクルしたBDFが燃料の天ぶらバスは、においが優しい



出来上がったポット苗はハウスで育ててから畑に定植

最後は、実際に苗を植える畑を訪れ、「これから収穫まで、多くの人手が必要になります。ぜひみなさん、協力してください」と吉田さんが呼びかけました。帰りのバスでは、それぞれ感想を述べました。9歳の娘と参加した東京都府中市の西川雅大さん(44)は「震災後、宮城県の登米市で4日間、ボランティア活動をしたが被災者に接することはほとんどなかった。今回はじかに話を聞くことができた」と言います。今回のツアーには、いわきおてんとSUNプロジェクトのコットン事業アドバイザーを務める「アバンティ」社長の渡邊智恵子さん(61)が同行しました。「日本に流通する綿製品のほとんどは外国からの輸入綿。被災地でオーガニックコットンを栽培す



地元の神社。大きな余震で神社も被害に遭ったという

ることは、単に雇用の創出だけではなく、日本の繊維産業の再生などさまざまな意味を持つ」と話していました。フクシマ・オーガニックコットンプロジェクトの問い合わせはザ・ビープル(☎0246・52・2511)へ。

国内外のエコツアーを企画するリボン〈エコツーリズム・ネットワーク〉では、オーガニックコットンプロジェクトが発足した昨春から、「天ぶらバス」によるボランティアツアーを実施。種まきから収穫まで、成育に応じて日程が組まれ、次のツアーは6月15日。草取りの作業を予定しています。費用は6000円。問い合わせは同社(☎03・5363・9216)へ。



ファッションの小売の現場 「エシカル」がキーワードに

3つの基準でセレクトショップをデパートに出店

エシカルという言葉をご存知ですか。英語で「倫理的な」あるいは「道徳上の」といった意で、欧米では、社会や環境に配慮した行動に対して用いられています。日本でもここ数年、ファッションやデザインなどの分野で「エシカル」を一つのキーワードにする動きが出てきました。

【明珍美紀、写真も】

東京や大阪、福岡などのデパートを中心に展開されている「スマイル・セレクトショップ」は、環境に配慮した素材でつくられた衣類やフェアトレード（公正貿易）の雑貨などを集める新しい形態の移動店舗です。環境関連の商品や販売企画を手がける「チーム・グリーンズ」がプロデュース。売り場を通じて、エシカルなライフスタイルを提案しようという試みです。

そうこう横浜店（横浜市）3階のフロアに4月末から5月13日まで出店したショップには、カンボジア製のシルクのストールやエチオピア製のオーガニックコットン

の衣類、ケニアの聴覚障害者らがつくったアクセサリ、ルワンダの女性たちによるバスケット編みの製品などが並びました。さらに「カンボジア発のエコブランド」としてこの春から日本で本格的に売り出された「スマテリア」のバッグが登場。イタリヤ人の女性デザイナー2人が06年に設立し、不用になった布や金属などリサイクル素材を用いて機能的なバッグを製作しています。そのほか、米国のブランドで、売り上げの一部をアフリカの貧困撲滅や女性の自立支援の活動に寄付している「オムニビース」が参加していました。

「自然環境、社会、地域との調和を重



ルワンダのバスケット編みの製品

持続可能な社会にグリーンシフト チーム・グリーンズ

づくりという意味です。

川上さんは、高校を卒業後、アルバイトをして学資をためて20歳のときに米国の大学に留学し、国際政治や環境問題を学びました。帰国後、IT（情報技術）企業に勤めましたが「現代人が元気になるライフスタイルを提案する事業をしたい」と5年で退社。環境関連のマーケティング会社を経て3年前、有志でチーム・グリーンズを起業しました。「より多く

ルワンダの契約生産者の女性
Ruisse B提供

③トラディショナル（伝統的）——という3つのエシカル基準を設けました。①は環境に配慮した素材や加工、省資源や二酸化炭素削減を促すものなど。②はフェアトレードや災害復興、途上国支援などにつながるもの。③はその地域の伝統技術、文化を生かした

の人の目に触れてもらいたい」とデパートの催事出店に着目し、初めての出店は東京・渋谷のデパート。「予想以上にリピーターが多く、後半になって売り上げが伸びた」といいます。

現在、参加ブランド数は約90で、出店日数は年間120日以上。福岡三越の1階には常設コーナーがあります。「どうか『石の上にも3年』が過ぎた。今後は自社製品の開発を目指す」と川上さん。「エシカル商品の市場はまだ小さいが、他のバイヤーとも協力して一般の売り場に浸透させていきたい」

「買物で世界を変える」というキャッチフレーズがありますが、「最終的には、無駄な商品の生産や消費をなくしていきたい」と川上さんは話します。

スマイル・セレクトショップの次の開催は5月30〜6月19日、東京・渋谷の東急東横店で。以降の日程はチーム・グリーンズのホームページ（<http://www.team-greens.co.jp>）を

「思い」をやり取り xChange発案 丹羽順子さん



発案した丹羽順子さん

「ファッション・シェア・パーティー」と銘打つ衣類の交換会「xChange」（エクステンジ）は、お金をかけずに衣類を循環させる“ハイパーエシカル”なファッションと言えます。

着なくなった衣類や靴などを持ち寄る、“物々交換”のスタイル。持参した人は「エピソード・タグ」と呼ばれるカードにその服にまつわる思い出や、次に着る人へのメッセージを記入します。「お金ではなく『思い』をやり取りする。人とつながりながら無駄なく使い続けていこうという目的です」と発案した環境活動家の丹羽順子さん（39）は言い、6年前から各地で企画しています。

丹羽さんは03年から1年間、ロンドンの大学院に留学して「持続可能性とリーダーシップ」について学び、エシカルという言葉に出会いました。「イギリスにはエシカルコンシューマーというNPOがあって活動の目的は倫理的な消費者を育てること。環境配慮型の企業を調べて雑誌に順位を発表していました」

エシカルの流れはその後、欧州各地に広がり、パリやベルリンなどでエシカルファッションショーが開かれました。オーガニックコットンやリサイクル繊維など環境を意識した素材かどうか、製造段階で自然エネルギーが使われているか、子どもたちに労働をさせていないかなどが参加ブランドに問われます。



基調講演する生駒芳子さん
東京・目黒のHUB Tokyoで

ethical 東京でエシカルコットンサミット

「コットンの日」の5月10日、「エシカルコットンサミット」（リー・ジャパン、NPO法人ACE主催）が東京・目黒で開かれました。ファッションジャーナリストの生駒芳子さんによる基調講演があり、「エシカル」の由来などについて解説。環境問題では、米国で1962年に刊行された「沈黙の春」（レイチェル・カーソン著）をはじめ、さまざまな市民運動が各地で展開され、「何かの犠牲のうえに豊かさを築く」という社会意識を変えようという動きが「エシカルに結びついた」。

日本でもファッションの小売の現場に変化が芽生えつつあり、「エシカルな中に遊び心やファンタジーがあるとコミュニケーションが生まれる」と生駒さんは話していました。

若い世代向け「INHEELS」 ウェブショップを開設



織研新聞社主催のファッションや雑貨の展示会「プラグイン」が3月下旬、東京の渋谷ヒカリエホールで開かれました。会場の一角に設けられた「グリーンライフスタイルデザインゾーン」はチーム・グリーンズが構成などを担当。エコやエシカルな商品を目指すデザイナーやつくり手を紹介し、バイヤーらとつなぐ目的です。

出展ブランドの一つ、「INHEELS（インヒールズ）」（<http://inheels-ef.com>）は岡田有加さん（28）＝写真＝女性デザイナー2人で運営。昨年6月にウェブショップをオープンしました。インドやネパールなどを訪ねてオーガニックコットンなどの原料を調達。デザイン案を出して現地の工場などに縫製を依頼しています。「エシカルファッションは着心地がいいナチュラル風やエスニックなどが中心。私たちは刺激的でアンチ優等生的なファッションを目指しています」と岡田さん。ターゲットは学生や20～30代前半の女性で「生産者の暮らしやコミュニティの環境など商品の背景にあるストーリーを感じてもらいたい」。取り扱いアイテムは衣類やバッグ、ベルトなど約40種。Tシャツは3900円から。



「持続可能な社会にグリーンシフトを」と呼びかける川上征人さん

富士山の雄大な姿を 眺めながら畑で作業

静岡県富士市の照土富士

富士山のふもと畑で、無農薬で育てられた野菜がすくすくと伸びています。農場の名前は「照土富士」(テラス・ド・フジ)。さわやかに晴れた新緑の季節。「畑から見る富士山は格別」と聞き、農場を訪れました。【明珍美紀、写真も】

ロメインレタスやスナップエンドウ、春ダイコンやトウモロコシ……。太陽の光を浴びる葉っぱの向こうには、富士山の雄大な姿。

「富士山を眺めながらの農作業は、気持ちいい」。農場長の伊藤崇介さん(38)が目細めます。「時間によって見える姿が違う。早朝の方がもっとくっきり見えますよ」

JR富士川駅から徒歩約10分。旧国道1号線(現在は県道)沿いに広がるミカン畑が照土富士の目印です。中に入って

じやり道を上っていくと畑が広がっています。伊藤さんやスタッフの小俣洋さん(34)らが、農業や化学肥料を使わず、日々、工夫しながら作物の世話をしています。

無農薬、無化学肥料で 野菜や果物を育てる

細やかに水やりをしたり。「植えたときは大事にしてあげないとね」と伊藤さん。これから収穫を待つソラマメは「空に向けて実がなるけれど、食べごろになるとこうべをたれて、探ってくれと言っているんですよ」。野菜たちと会話をしているみたいです。

病気を機に農業の道へ

伊藤さんは学生時代、腸の病気を患ったのを機に自分の食生活を見直し、福祉

作業所での仕事などを経て農業の道に入りました。実家のある横浜市や相模原市などの農場で野菜づくりを学び、講談社の関連会社が運営する「オトワファーム」のスタートに伴い「昨年1月、農場長に就任。「照土富士」というブランド名で、旬の野菜や果物の宅配サービスを始めました。チップ(剪定枝)を混ぜて発酵させた牛ふんの堆肥(たい肥)などを使い、雑草はほとんど取りません。「有機農業はそれぞれ持論がある。いいところを吸収しながら自分たちのやり方を追求している」。もともとあったミカン畑の手入れやキウイの受粉などは近くの農家の人たちに教わっています。

万願寺とうがらしなど 在来種も

手がける野菜や果物は計100種以上。安納芋や万願寺とうがらし、大浦ごぼうなどの在来種も栽培しています。「黒豆はこの農場に来る前から自分で種を採り続けている」と伊藤さん。畑では、黒田



「いまが食べ頃」とスナップエンドウを見せる伊藤崇介さん

「生態系にあふれた農業を目指したい」 農場長の伊藤崇介さん

富士山の雄大な姿を背に畑の世話を
する伊藤さん(右)と小俣洋さん



1 コンフィチュールはミカンとキウイの2種類 2 青島みかんのジュース 3 ソラマメの実を生で食べるとさくつとした食感 4 旬菜セットの一例 照土富士提供

五寸人参が白い小さな花を咲かせていました。商品は、季節の野菜を箱詰にした「旬菜セット」がメインです。加工品では昨年から完熟の「青島みかん」をしぼった100%ジュースがアイテムに加わりました。「ミカンは11月の後半から出荷するけれど、ジュース用のものは酸味が丸くなる年明けまで待つ」とのこと。そのほか、フルーツ・コンフィチュール(ジャム)などがあります。富士山の世界遺産登録に注目が集まっていますが「これを機に、周辺の自治体が協力してごみ問題を解決しなければ」と伊藤さんは気を引き締めます。富士山の自然を大切にしながら「生態系にあふれた農業を目指したい」といいます。旬菜セットは2000円から(送料別)。問い合わせは照土富士(ヘファクス)0545・81・3313で。

照土富士の野菜でデリカテッセン

5月25日にオープンした「野菜倶楽部 ottonoha Café」(東京都文京区関口2)は、照土富士の野菜をメインにしたレストランです。

シェフは、都内のイタリアンレストランを経て、同カフェで腕をふるいます。メニューの中心はデリカテッセン(総菜)。ランチはサラダバーがあり、店頭では野菜の販売も。建物には100%国産スギ材による純木質耐火集成材が用いられ、国内初の試みです。隣は講談社野間記念館。緑豊かな地で木の肌合いを感じられる空間になっています。

営業時間は午前9時半～午後5時。月曜日。問い合わせは同カフェ(☎03・3942・1077)。



カフェでは室内の柱や梁に、東北など国産のスギ材を使用した純木質耐火構造部材を使用

旬の野菜が盛りださるサラダバー



ポレポレでいこう

ケニアの人々がよく口にするのが「ポレポレ」。スワヒリ語で「ゆっくりいこう」という意味です。

8年前のこと。ケニア山麓のホテルでワンガリ・マータイさんと会う約束をしたのですが、3時間過ぎて姿を見せません。秘書が気を遣って「日本では誰もが時間厳守と聞いていますが、本当ですか」と聞いてきました。

「電車が2分遅れても車内アナウンスがあります」と答えると、彼は目を丸くして「日本人は時間は消えてなくなってしまうと思っているのですね」と言うのです。「私たちは時間はサークルのようなもので、また出会うことができると信じています。人の出会いと同じです」

日本を離れるといつも、この時の彼の言葉を思い出します。

【MOTTAINAIキャンペーン事務局長・七井辰男】

MOTTAINAI 文具シリーズに ノートも登場 20人にプレゼント



「MOTTAINAI文具シリーズ」に、ノートが登場しました。再生上質紙を使ったB5サイズの40枚。MOTTAINAIキャンペーンのイラストをワンポイントで使い、自然な風合いの作りとなっています。背表紙はブルー、グリーンなど5色。発売元の立巳物産（東京都千代田区）の矢野誠州社長は「紙ペンや紙シャープペンとセットで使ってもらえると、うれしいです。子どもたちが環境を考えるきっかけとなる商品開発を心がけました。それが文具シリーズです」と話していました。286円（税込み、日本製）。



ノートを手に「奮ってご応募ください」と笑顔を見せる矢野社長

2冊をセットにして20人にプレゼントします。はがきに、郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号を明記し、〒102-0083 東京都千代田区麹町3-12-14立巳物産プレゼント係までご応募ください。6月30日必着。これらの商品は「MOTTAINAI Shop」のホームページ(<http://mottainai-shop.jp/>)で購入できます。

モッタイナイは世界中のアイコトバ。MOTTAINAIキャンペーンの関連情報が満載です
オフィシャルサイト

<http://mottainai.info>

MOTTAINAI
ようこそ
MOTTAINAIへ。



きれいな川と暮らそう ライオンが基金に寄付

ライオンは「トップで、1ハコ1エコ!!」キャンペーンを展開しています。「トッププラチナクリア」(3月28日～8月31日出荷品)1箱につき1円を、公益社団法人・日本河川協会の「きれいな川と暮らそう基金」に寄付。同協会は、河川の環境維持に取り組む団体に活動費として助成しています。08年度から取り組み、12年度までの累計は約5255万円に達しました。

同社では、洗剤の使用と関係のある河川の発泡や、水中の栄養分が偏り、生物に影響をもたらす富栄養化などの水環境問題に「率先して対応した」といいます。「水とともにお使いいただく商品を提供していることから、川をきれいにしたいという思いがあります」(ファブリックケア事業部)。数量限定「トッププラチナクリア ヒーリンググリーン」の香りも「1ハコ1エコ!!」の対象商品です。

洗剤物を少ない水で洗う洗濯環境に最適な商品を開発したのです。植物油脂の比率も75%まで向上させました。「お急ぎコースの洗濯でも汚れ落ちが高いことも特徴です。時間短縮により、節電にもつながります」

6月にはMOTTAINAIキャンペーン※1と共同企画した数量限定「トッププラチナクリア」が発売されます。「MOTTAINAIキャンペーン」も節約+エコ。このコラボレーション企画で新たなお客様がトップに興味を引く機会になればと思います」と山内さんは期待を寄せています。

「トッププラチナクリア」 数量限定パッケージを 15人にプレゼント

数量限定「トッププラチナクリア」を15人にプレゼントします。はがきに、郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号を明記し、〒102-0083 東京都千代田区麹町3の12の14、立巳物産ライオン係までご応募ください。7月31日必着。



MOTTAINAIのイラストがかわいらしい数量限定版のトッププラチナクリア

「トッププラチナクリア」は、タレントのルー大柴さんが出演する問題に回答するか、ライオンの洗濯関連商品を300円以上購入して応募すれば、抽選で10人に10万円のJTB旅行券が、100人を選べるグルメカタログギフトなどが当たります。応募期間は6月15日～8月31日。問い合わせはキャンペーン事務局(☎06・6535・2635、平日午前10時～午後5時、8月12～16日は休み)へ。



衣料用洗剤の最前線で働くライオンの山内あずささん

粉末担当となった山内さんは考えました。いまどきの洗濯事情と地球環境保護。消費者は家計へのメリット(節水、節電)も求めています。「節約+エコ」に対応した商品開発が必要だ。そして、11年3月に登場したのが「トッププラチナクリア」(1キ、オープン価格)でした。「粉末型は液体型に比べ、見える汚れに強い酵素や漂白剤を入れやすい特徴があります」と山内さん。植物原料の界面活性剤はそのままに、新開発された酵素「プラチナゼ」などを配合して「がんこ汚れ」を落とし、新たにクリアプロテクト成分を配合して一度落とした汚れが他の衣類に移らないようにしました。たくさん

ライオンと MOTTAINAIが コラボ

洗濯機は年々大型化し、節水型が主流になっていきます。さまざまな汚れがついた家族の洗濯物を一緒に洗う「まとめ洗い」も増加しています。その中で「白い衣類がきちんと白く洗えない」という消費者の声がありました。2010年4月に粉末洗剤の担当となった山内さんは「担当になって洗濯物の汚れ落ちを意識するようになりました。白いTシャツが、洗濯しているのにかねずみ色

になっていて、ショックを受けました」と振り返ります。その原因は洗濯中の汚れ移りでした。当時の主力商品は09年発売の「トップ」。それに先駆けて発売された「3つの酵素パワートップ」(06年)では、洗浄成分の約4分の3に「パームヤシ」を由来とする植物油脂が原料の界面活性剤を採用。従来の石油原料に比べて二酸化炭素(CO₂)の排出量の削減に成功し

粉末タイプの主力商品「トッププラチナクリア」



お洗濯でのMOTTAINAI メインキャラクターは ルー大柴さん

6月から
キャンペーン開始

節水や節電に役立つ商品を通して環境の大切さを呼びかけるキャンペーン「お洗濯でのMOTTAINAI」が6月から始まります。ライオンとMOTTAINAIキャンペーン事務局のコラボ企画で、今年で3回目を迎えました。

日用品の衣料用洗剤が進化しつつあります。ライオンの粉末濃縮タイプを代表する「トッププラチナクリア」。その商品開発、店頭販売、プロモーションなどを企画・統括するファブリックケア事業部副主任、山内あずささん(43)に、「節約+環境(エコ)の時代の商品開発」をテーマに話を聞きました。

【浅田芳明】

Reduce(ごみ削減)、Reuse(再利用)、Recycle(再資源化)の3Rと、地球資源に対するRespect(尊敬の念)が込められた言葉「もったいない」を、環境を守る国際語「MOTTAINAI」とし、地球環境に負担をかけないライフスタイルを広め、持続可能な循環型社会の構築を目指す活動です。ワンガリ・マータイさんが提唱し、2005年にスタートしました。企業からの協賛や環境にやさしいオリジナル商品の販売、各種イベントなどを通じてキャンペーンを展開し、収益の一部をマータイさんが創設したケニアの植林活動「グリーンベルト運動」に寄付し支援しています。マータイさんは11年9月に亡くなりましたが、マータイさんの遺志を継いでキャンペーンは継続しています。

(※1)MOTTAINAI
キャンペーン

衣類の製造工程から生じた布を、包装に活用することを発案した野田まいこさんを



自然化粧品会社「スタイラ」



残布リユース活動を展開
顧客らの工夫が加わり、
リユースからリメイクへ

布の端布を、ラッピングに活用しよう。自然化粧品会社「スタイラ」（東京都渋谷区）では、エコアクションの一環として、衣類をつくる工程で生じた布で商品を含む、残布リユース活動に取り組んでいます。

BIGI、ビームス、ユナイテッドアローズのアップレルメーカー3社が賛同し、衣類の製造工程などで生じた残り布を提供。顧客が瓶のボトル商品を購入した際、その布でくるんで渡します。肌触りがいい布は緩衝材代わりに使われます。持ち帰って包みを開けた後も、端を縫ってランチョンマットやブックカバーにするなど「リユースからリメイクへ」と用途が広がっている、といいます。

「アップレル関係者から、洋服の残布が多いという話を聞いたのがきっかけです。商品をお渡しするときのエコロジカ

ルなアクションとして発案しました」とブランドマネジャー、野田まいこさん（38）は説明し、2011年春から実施しています。

同社は、美容業界でも「安全、安心な商品」と野田さんらが約10年前に設立。初めはナチュラルコスメの輸入販売からスタートし、現在は米国の社会起業家、ジョンマスターさんが創業した「ジョンマスターオーガニック」の運営を手がけるほか、「エルバビバ」など計5ブランドを取り扱っています。いずれのブランドも植物由来のオーガニック（有機）の素材が中心で「自然エネルギーの導入など環境対策を推進している」ことが特徴です。

スタイラではこのほか、東日本大震災の被災者を支援するアクションプログラムを展開中です。店での買物や通販で顧客がためたポイントを換算して義援金にするポイント募金をはじめ、チャリティイベントなどを実施。これまでの2年間で約970万円を、被災地で活動する支援団体などに寄付しました。

日本でもオーガニックの化粧品が一つの分野として注目されつつあります。環境問題でも企業としての責任を果たしたい（同社）といいます。

スタイラのホームページ（<http://styla.inc.jp/>）。

【明珍美紀、写真も】

毎日新聞 水と緑の地球環境本部 活動紹介

水と緑の地球環境本部は毎日新聞創刊135年を迎えた2007年に創設されました。それまでに実施してきた環境に関連する各種キャンペーンを総合的に展開し、地域と地球規模の環境保全に貢献することが設立の目的です。2000年に始めた「富士山再生キャンペーン」、05年から取り組んでいる「MOTTAINAI（もったいない）キャンペーン」、06年からの「My Mai Tree」の植樹活動に加え、09年からは森林保全にも活動の幅を広げた「つながる森プロジェクト」を開始しました。そのほか、日韓両国の環境活動に取り組む団体・個人を表彰する「日韓国際環境賞」などが活動の軸になっています。

また、企業の環境担当者や環境NPOの学習交流会「毎日Do! コラボ」の開催など、環境分野の方々の交流促進を図っています。11年の東日本大震災以降は、環境NPOなどと協力しながら、さまざまな被災地支援を続けています。

「マイECO」は08年に創刊したフリーペーパーです。隔月刊で、環境に関わる著名人らのインタビュー、環境活動のレポート、環境保全につながる暮らし方や食、MOTTAINAI キャンペーン情報などを紹介しながら、環境保全や私たちの生活のあり方について、読者のみなさんと共に考えます。



発行日：2013年5月31日
編集・発行：毎日新聞社 水と緑の地球環境本部
発行人：斗ヶ沢秀俊
〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1の1の1
☎ 03・3212・2607 FAX 03・5208・4946
E-mail：myeco@mainichi.co.jp
デザイン：中村千晶、山本幸枝

【表紙「富士山」】今年大型連休の初日、山梨県富士吉田市を訪れると、青空のもと、さわやかな富士山の姿が見えました。（撮影・手塚耕一郎）

●毎日新聞では写真記者らが記録してきた富士山の写真をもとに「富士山ルネッサンス ポストカード」を製作し、世界文化遺産実現を応援してきました。現在、14シリーズあり、5枚1セットで525円。売り上げの一部は東日本大震災で被災した子どもたちの教育支援として寄付しています。問い合わせは富士山再生キャンペーン事務局（☎03・3212・2314）へ。

編集後記

富士山のふもとでの農作業は一言で「気持ちいい！」。

今号のFOODに登場した「照土富士」の農園の農場長、伊藤宗介さんが語ったように、日本一高い山は多彩な表情を見せ、人々の心を魅了します。私も農園を訪れた際に、畑からの眺めを楽しみました。この季節のお薦めは、白いミカンの花が揺れる先にそびえる雄大な姿でしょうか。

一方、富士山のごみ問題はどうなっているのでしょうか。NPO法人「富士山クラブ」によると、登山者が多く利用する五合目以上は、それほどごみを見かけなくなったそうです。地元市民やボランティア団体が清掃活動に力を入れ、山ろくいのポイ捨てや不法投棄も以前より減ってきたとはいえ、ゼロになったわけではありません。「世界遺産に登録されると人が押し寄せ、自然破壊が進むのでは」と心配する声があります。

ごみの持ち帰りや減量の努力は、山に限ったことではありません。分別の徹底や過剰包装は避けることなど、普段の行動が自然になるべく負荷をかけない暮らし方につながるのでしょうか。（M）

「マイECO」は毎日新聞東京本社1階（東京メトロ東西線竹橋駅下車）の「MOTTAINAI STATION」などに置いています。また、「マイECO」を配布してもらえる市民グループや店舗、カフェなどを募集しています。

詳しくは毎日新聞水と緑の地球環境本部（☎03・3212・2607）へお問い合わせください。



ホームページ ☎ <http://mainichi.jp/feature/ecology/>

毎日新聞社は日本の里山を保全・再生する活動を支援しています。マイECOの用紙の一部は日本の里山の保全と再生に役立てられます。